

スピリチュアリティと看護に関するノースカロライナ研修報告

荻野 大介*1, 石井真紀子*1, 工藤 朋子*1, 安保 寛明*2

Spirituality and nursing in U.S.A. North Carolina

Daisuke Ogino*1, Makiko Ishii*1, Tomoko Kudo*1, Hiroaki Ambo*2

キーワード：スピリチュアリティ, 看護

はじめに

慢性疾患や進行性疾患を有する患者のQOLを保持・増進する上で、身体的健康にのみ着目するのではなく、患者の心理社会的健康状態にも着目した治療や援助が行われることが重要である。人の心理社会的健康を査定する上で着目されている概念に、スピリチュアリティとストレスマネジメントがある。これらの概念は、糖尿病療養指導や在宅ターミナルケアなどの臨床領域で看護活動に取り入れる要素として度々推奨されてきているし、健康増進ライフスタイルプロフィール（Health Promoting Lifestyle Profile II : HPLP II）の構成概念となるなど、研究の概念枠組みにも取り入れられてきている。

スピリチュアリティは「個人と神・自己・コミュニティという対象との関係性、つながり」¹⁾により表現されることが多く、「人間の生活における根本をなすもの、統一性・一貫性をもたせるもの、核となるもの、など信念体系である」²⁾とも記されており、個々人の生活習慣や価値観が集約的に表現されるとも言われている。即ち、スピリチュアリティと看護について理解を深めるためには、文化的背景の異なる地域での医療や看護のあり方について知る必要がある。そこで我々は、異文化における慢性疾患や進行性疾患に対する看護実践と、異文化においてスピリチュアリティに関係する行動様式や文化的環境について理解を深めることを目的として、学部間提携を締結しているノースカロライナ大学ウィルミントン校に赴き、ウィ

ルミントン市にある医療機関において看護や医療に関する見学研修を行った。

研修期間は平成18年3月21日～3月28日であった。

研修の概要

1) Zimmer Cancer Center

Zimmer Cancer Center は、がん患者が化学療法や放射線療法、リハビリテーションなどを通院しながら受けられる医療機関である。2000年1月に開設されたこの施設は、既に開設されていたNew Hanover Regional Medical Center (628床の総合病院)の敷地内にあり、この病院の基金やコミュニティの寄付によりオープンしている。

玄関を入るとホテルのロビーを思わせるような、明るく、暖かい雰囲気が漂っていた。腫瘍専門看護師であり看護管理者のLaurie Graham氏が我々を案内してくれた。

わが国においても、腫瘍の縮小を目的として通院しながら抗がん剤や放射線の照射を受けている人々が数多くいるが、Zimmer Cancer Centerでは、疾患や治療により身体の様々な機能に障害を受けた人々が、可能な限り日常生活に適応し、自立した生活が送れるよう、理学療法や作業療法、言語療法が行われている。また、治療の経過において比較的軽視されがちな栄養失調に対して、栄養士が個人およびグループを対象に、栄養状態を改善する目的で介入している。

*1 岩手県立大学看護学部

*2 東北福祉大学健康科学部

施設の中で印象に残っているのは、いたるところに自然の風景が散りばめられていることである。化学療法を行うユニットのナースステーションや廊下には風景写真がはめ込まれていて、内側からライトで照らされることで、一層明るく際立っていた。また、患者や家族が図書やリーフレット、インターネットを通して必要な情報が得られるように、専用の部屋が準備されていた。

各部門を一通り案内されたところで、我々は、LaSonia Roberts-Melvin という女性を紹介された。彼女の Zimmer Cancer Center での役割は「Patient Navigator」という聞きなれないものであった。彼女の主な活動は、がん患者が必要としている治療や看護が適切に受けられるよう、それらを阻む様々な障壁を取り除くことである。それは例えば、通院が困難な患者に必要な交通手段を確保することであったり、障害を抱える患者の自立を促すために住環境を整えることであったり、様々な事情で十分な食事の取れない患者に対して、適切な食事を確保することなどである。

このように Patient Navigator は、Zimmer Cancer Center を訪れた患者のニーズを捉え、適切な資源を紹介する役目を担っている。

米国は多民族国家であり、例えば言葉が通じない少数民族の民族に対して、あるいは低所得層に対して、特に Patient Navigator の役割が発揮されるという。

また、検診などにおいてがんであることを指摘された住民の中には、「祈る」ことで精密検査や治療を放棄する例も決して少なくないという。こういう場合、単に信仰に厚いということでは片付けられない、医療補償や低所得の問題が背景にあるという。

このような住民に対して、「信仰から受診の必要性を感じない」、「死を恐れてはいない」という彼らの健康に対する信念を尊重しつつ、受診行動の大切さを教育する方策を、様々な資源を活用しながら模索するという。

Patient Navigator のレクチャーを通して、改めて、米国が多民族で構成されていること、所得において得に階層化が著しいこと、そして信仰に厚いことを再認識した。

2) ナースプラクティショナーによる糖尿病患者に対するプライマリケアの実践

ナースプラクティショナー（以下、NP）が糖尿病診療を行っている Wilmington にあるクリニックで、糖尿病患者 3 名の診察場面を見学した。そのクリニックには、医師と NP がおり、連携を取りながら患者の診察が行われていた。

NP の診療場面では、いずれの患者にも足の観察（糖尿病患者は糖尿病を持たない人に比べて、末梢神経障害や感染、末梢血流障害によって、下肢の壊疽に至ることが多い）を行い、患者の足の状態を患者と共に確認していた。患者は NP が足の観察を行う際快く応じ、末梢神経障害の有無と程度の観察のため NP が足を刺激するのに対し、質問に答えていた。日本においても糖尿病患者の足の壊疽を予防する試みや看護介入は行われているが、全ての患者に確実に行われていることや、患者と共に足の状態を確認していくことで患者が自らの足の状態に関心を示していたことが印象的であった。

血糖の検査値について説明する場面では、患者の血糖の目標値と検査結果の値の差を視覚的にわかりやすい絵を用いて示し、患者に状況を説明していた。糖尿病を持つ患者にとって、まず自分の病状コントロールの状態を知ることが重要である。そのために、患者が理解しやすい方法に工夫がなされ、患者と治療の目標を共有しようとする意図が感じられた。また、患者の血糖値やグリコヘモグロビンの検査結果の値が目標値よりも高い場合でも、患者にその結果に至った理由についての話は聞かずに、その生活が良かった、悪かったとの評価はせず、支持的に話を聞いていたことが印象的であった。患者自らが日々の生活の中で血糖値に影響を与えている行動について振り返ることを促し、患者のセルフケア行動につなげていこうとする姿勢は日本と同様であると思われる。患者が自己の持つ糖尿病をコントロールしていく上で必要なセルフケア行動を起こすために、学問的な根拠を持ち、効果的であると考えられる看護行為やプライマリケアが行われていることは強く印象に残った。

NP はその他、医師に相談しながら患者への SMBG（自己血糖測定）の導入を行い、患者への診察は NP で終始していた。日本においては、看

看護師は処方権や診療を行うことはできないため単純に比較することはできないが、今回見学したクリニックでのNPの果たしている役割は患者のプライマリケアに対して大きな責任を持つものであった。

3) Bolton Health and Wellness Center (写真1)

Bolton Health and Wellness Centerは、2003年10月に設立され、政府や民間の助成金を受け、主としてBolton・Sandy field地域との連携をはかりながら、UNCW看護学部が運営している施設である。このセンターは、Bolton Township及びeastern Columbus County全ての住民の健康な生活、QOLの向上を目指している。主なサービスは、検診（糖尿病、高血圧、高脂血症、うつ病など）、健康相談、健康教育、予防接種などである。対応時間は、月～木曜日は8:30 a.m.～5:00 p.m. 金曜日は8:30 a.m.～12:00 p.m.である。職員は、Family Nurse Practitioner, Registered Nurse, clerkが常勤している。その他に、UNCW看護学部の教員や学生、老年学や社会学の専門家など、学際的なチームで関わっている。

Boltonは、Wilmingtonから車で1時間程度の距離にあり、非常に閑静な町並みの中に、センターは建てられていた。受付には、「センター利用の無料月間のお知らせ」が掲示されており、医療保険制度を利用することができない貧困者、あるいは文化や言語、教育レベルが障害となってい

る高齢者など、ヘルスケアサービスを利用できずにいる住民への配慮が感じられた。

我々は、F.N.PであるJohn Beaver氏から、施設の概要説明を受けた。今回は、その中でも印象に残った「Wellness Classes」について紹介する。

Wellness Classes

毎月第3木曜日の午後で開催している、集団健康教育の場である。毎回、30人程度の住民が参加している。テーマは「高血圧」「乳がん」「コレステロール」「栄養」「大腸がん」などである。我々は、実際に健康教育で使用している視聴覚教材を見せて頂いた。日本でも、実物大のフードモデルはよく使用されているが、例えば、ハンバーガーを1個食べた場合、どの位の脂肪が身体に取り込まれているのかをイメージしてもらうために、脂肪含有量を示す実物モデルが用いられていた。薄いクリーム色で、感触も脂肪をイメージさせるものであり、効果的に理解を促すことができる媒体であると感じた(写真2)。その他、高脂血症の血管モデルや各種パネルなど、いずれも正確な知識をイメージしてもらうための工夫がなされていた。

支援のポイントとしては、その地域の生活背景を把握し住民が行動変容できるように具体的に助言する、達成可能な短期目標を共に考える、家族全体を視野に入れて助言するなど、基本的な姿勢は日本と同様であると感じた。

「Wellness Classes」がもたらす効果として、同じ健康課題をもつ仲間と、情報交換をしながら

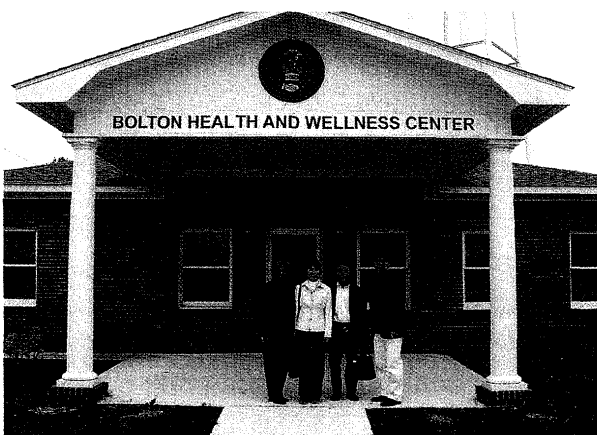


写真1 Bolton Health and Wellness Center

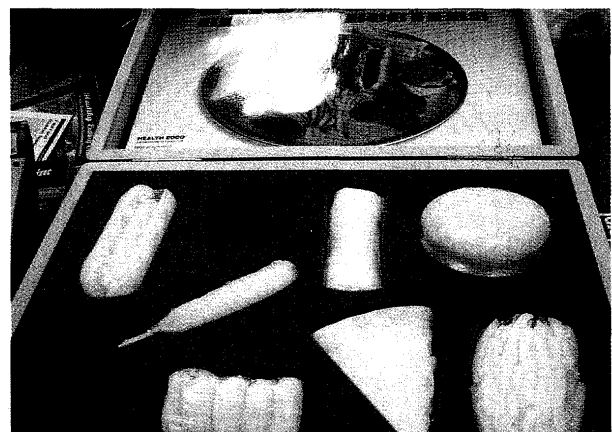


写真2 脂肪含有量がわかるフードモデル

取り組むことができる利点があげられる。また、参加者が、自宅や近隣の人々に学んだことを伝えていくことで、少しずつではあるが、知識の普及啓発にもつながっていることがわかった。Bolton 地域には、「神様にお祈りするから」と治療を断る方もいるという。Wilmington の病院はもちろん、このセンターを利用していない住民に対し、正しい知識の普及啓発を目的に、Church グループが活動しているというお話も伺った。食事の配給を求めて、教会を訪ねる貧しい住民に対して、食事から栄養を摂る大切さを教え、自分の健康について、少しでも関心を抱いてもらう努力をしているという。また、Church グループの勧めで、受診行動をとる住民もいるという。いずれも、この地域において、Church グループは影響力を持つ存在であることがわかった。日本では、国民皆保険の医療制度が当たり前となっているが、アメリカの実情を垣間見ることができた。

4) Labyrinth

研修を行った医療機関は3箇所であったが、今回の研修では、異文化におけるスピリチュアリティの在り方を知る経験が多くあった。特に鮮烈な経験として我々の印象に残っている、Labyrinth について記述したい。

Labyrinth は直訳すれば「迷宮」であるが、近年では「瞑想するための小径」という使われ方もあるそうである。我々が体験した Labyrinth はカトリック系教会の中にあり、集会室の床に幅 80cm ほどの小径がぐるぐると描かれていた（図

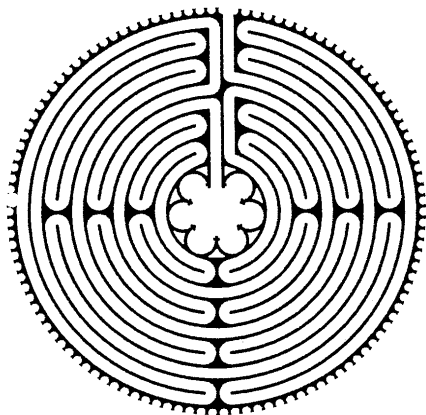


図1 Labyrinth

1)。Labyrinth の小径を辿りながら瞑想することは「Meditation Walk (瞑想歩行)」と呼ばれていて、それぞれの参加者が薄目を開けてゆっくりと歩いた。わが国で一般的に瞑想という場合には、座禅に代表されるような静座姿勢であろう。瞑想の方法が異なっていたことが影響してか、我々が Meditation Walk した時に頭に浮かんだ内容は、おそらく静止姿勢での瞑想とは異なる内容だったであろうという意見が交わされた。筆者らの中には、「歩く行為を行うため、過去から現在への時間経過に沿って考えた」「自分の瞑想世界に没入しすぎない感じがした」などの感想を持つ者がいた。

なお、Labyrinth があるのは教会だけではなく、ウィルミントン市内のとあるホスピスの中庭にも設置されているとのことだった。

おわりに

今回の研修を通して様々な見聞を広め、看護とスピリチュアリティについて、わが国との違いを感じるところがあった。Zimmer Cancer Center や Bolton Health and Wellness Center で聞かれた「神に祈る」ことで受診行動に結びつかないことがある文化的な背景は、とりわけ宗教観の薄い私たちには驚きであった。

また、国民皆保険制度によって十分な医療を受けられることが当たり前として考えられるわが国の状況からは、貧困者が受診行動に結びつかないという現実、目のあたりにしても具体的なイメージを持つに至らないことでもあった。自らが看護師として実践を行う上では、病む人達に提供していくケアは、自らの持つ常識やイメージなどの持ち合せている考えの範疇内で行われるものではなく、病む人達の持っている内面に対して理解を示し、その理解の中から導き出されるものであると考えさせられる。現在スピリチュアリティについてはその所在が明確なものではないが、人の内面に存在するものであり、内発的動機と強く関係を持つその人の健康行動を高めていく上では、その内面を構成しているであろう要素に目を向けていく必要が感じられた。

また、患者のそのような内面を理解し、内発的動機に作用し健康行動を高めていく上では、人の健康増進への介入について学際的な知識や介入方

法を有し実践できる看護師が望まれる。NPにおける上級看護実践は、その一端を担うものであると考える。

わが国では、日本看護協会が認定専門看護師制度として、複雑で解決困難な看護問題を持つ個人、家族及び集団に対して水準の高い看護ケアを効率よく提供するための、特定の専門看護分野の知識及び技術を深めた専門看護師の養成と認定が行われている。日本においても認定された専門看護師の実践が成果を現わし、患者のそのような内面を理解し、内発的動機に作用し健康行動を高めていく役割を担っていくことを切に望む。

現在、私たち4人を含む研究班は岩手県内の自治体との協働で、血圧や血糖などの測定値が高く受診の必要性があると考えられる地域住民に対する受療行動促進のための介入を行う予定である。

研修を通じて得た異文化における看護のあり方やスピリチュアリティに関係するさまざまな体験は、対象者集団のもつ文化的特性の理解が重要であることを再認識させられた体験であった。

謝辞

このような研修の機会を設けコーディネートしていただきましたUNCW看護学部の先生方、特にDr.BomarとDr.Kemppainen、ならびに各施設の皆様に深く感謝致します。

この海外研修は、平成17年度岩手県立大学全学プロジェクト等研究費・地域課題研究（研究課題：「慢性疾患患者のヘルスプロモーション行動促進のための看護介入研究—運動、スピリチュアリティ、ストレスマネジメントに焦点づけて—」）の助成を受けて実施されたものである。

【文献】

- 1) 今村由香, 河正子他: 終末期がん患者のスピリチュアリティ概念構造の検討, ターミナル, 12(5), 425-434, 2002.
- 2) 前掲書1)
- 3) Martha Ellen F. Highfield: Providing Spiritual with Cancer, Clinical Journal of Oncology Nursing, 4(3), 2000.
- 4) 樋口まち子, クローズ幸子: ミシガン州におけるナースプラクティショナーの活動 日本の専門看護師教育制の示唆として, Quality Nursing, 10(8), 773-781, 2004.

【資料】

- 1) New Hanover Health Network: Web site. Available at: <http://www.nhnhn.org/1273.cfm>. Accessed October 30, 2006